3 指導計画の作成と学習指導の工夫

(1) 学習指導の類型

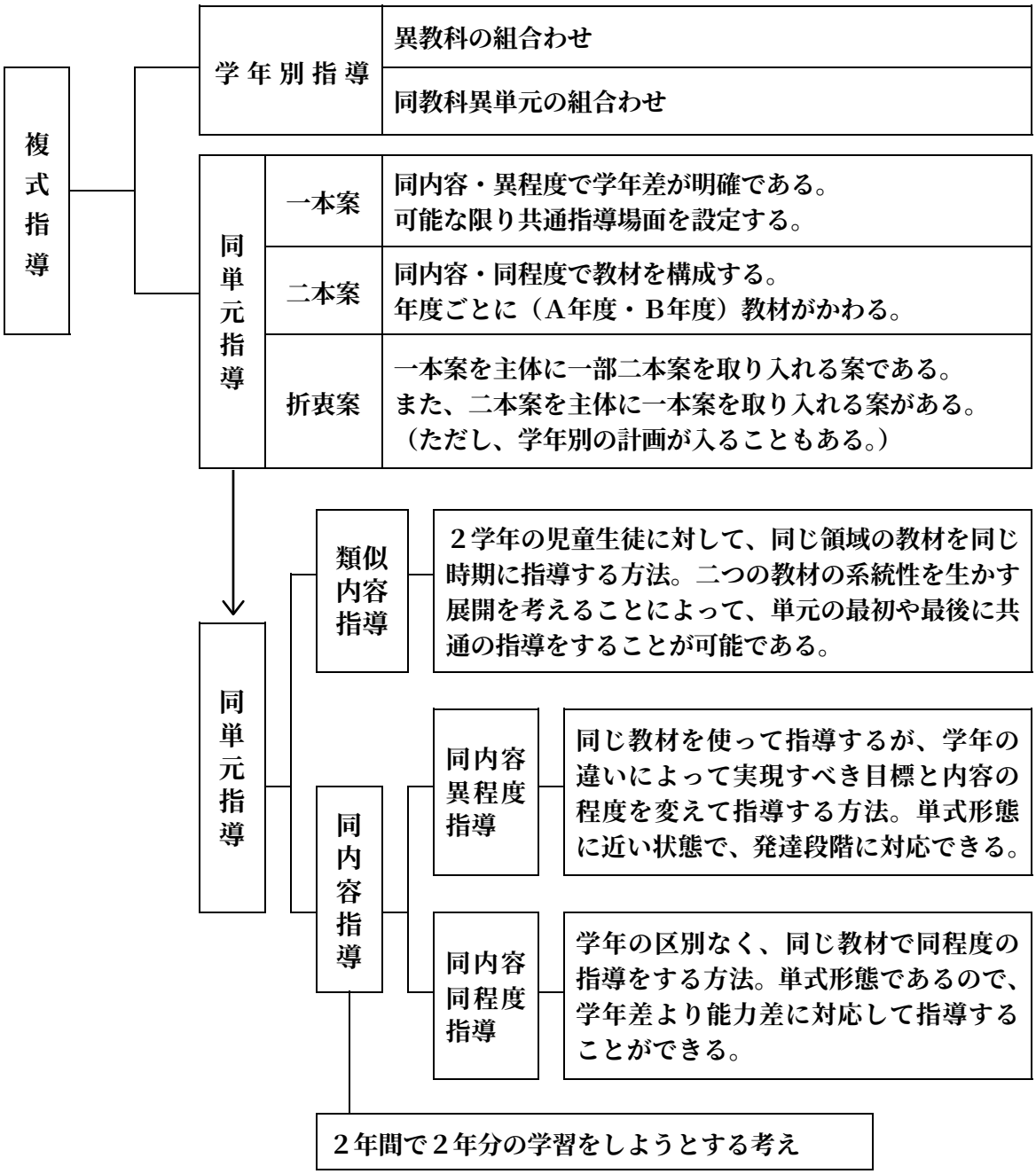
いろいろな指導法があるが、一般には次の二つに大別される。

① 学年別に指導する方法

② 二つの学年あるいは三つの学年を同単元（題材、教材、素材等）で指導する方法

いずれを適用していくかについては、児童生徒の実態、学年段階、教科等の特質及び教師の指導観等によって決まってくる。

※ 複式指導関連図



(2)　学年別指導と同単元指導

①　学年別指導の利点と問題点

ア　利点

・　教科の系統性を踏まえた指導が容易である。

・　学年の発達段階に応じた指導が容易である。

・　転出入の児童生徒や欠学年などの問題に左右されない。

・　特に低学年においては、同単元指導より比較的指導が容易である。

イ　問題点

・　導入（課題把握）や習熟・応用段階での指導に十分な時間が取れず、徹底した指導ができにくい。

・　学習活動に深まりがなく、個別指導など個人差に応じ一人一人を生かした指導が困難である。

・　直接指導と間接指導の組合せや、教師の「わたり」が複雑になる。

・　教材研究の時間が不足し、資料や教材の準備に時間がかかり、教師の負担が増大する。

・　両学年の協力的な学習の場の設定が難しい。

②　同単元指導の利点と問題点

ア　利点

・　上下両学年にわたる共通の単元を構成する過程で、指導内容が基本的なものに絞られ、資料の準備も能率的になるなど、効果的な指導が期待できる。

・　共通の指導場面が多く、少人数を対象にして指導することから、児童生徒一人一人に対して丁寧な指導を行うことが可能になり、個別指導の充実が期待できる。

・　共通の学習活動場面が多くなり、経験領域の拡大と集団思考による思考の多様化や深化が図られるなど、思考の広がりと表現力の向上が期待できる。

・　共通の思考場面を設定することにより、協力的な学習が可能となり、児童生徒の人間関係が深まり社会性の育成が期待できる。

・　共通のねらいによる実験・観察等が可能になるなど、教材・教具の準備や学習の展開の効率化が期待できる。

・　年間の指導計画が一元的になり、指導計画の作成、指導や準備等をまとまった視点から行うことができる。

イ　問題点

・　同内容指導では、上学年の教材で指導を行う場合、下学年にとって難しく未消化になる恐れがあり、下学年に対応した指導や評価が求められる。

・　系統性・順序性の強い教科では、指導計画の作成に難しさがある。

・　低学年、特に入学当初は学校生活に適応することに精一杯であり、それを第一に考慮する必要がある。

・　欠学年がある学校や、転出入の児童生徒が多い学校では問題が生じる。

・　教科書の給与時期を考慮し、両学年にわたるように配慮する必要がある。

(3)　指導計画作成上の留意点

①　学年別指導

学年別指導による指導計画では、学年ごとで学習する内容や目標が異なるため、直接指導や間接指導による学習形態をとらざるをえない。しかし、多学年による指導のよさ、少しでも多い人数による学習のよさを生かすため、次の点に留意したい。

ア　単元の導入や習熟段階、課題解決の検討の場面で共同学習ができるように指導計画を工夫する。

イ　年間の教材を比較検討し、できる限り同領域あるいは同単元の配列ができるよう工夫する。

ウ　教材の精選や指導の重点化を図り、ゆとりをもって学習に取り組める計画を立てる。

②　横割り二本案による同内容指導

同内容指導であっても、対象の児童生徒は２学年にわたっているため、生活経験や発達段階、学習能力等の違いを考慮した指導目標や評価内容について、各学校でよく検討するとともに、次の点に留意したい。

ア　学年間の系統性や順序性を考慮し、同一学年に配列すべき単元や教材を明確にする。

イ　入学当初や学年はじめ、学年末にふさわしい教材配列の順序を工夫する。

ウ　教材の傾向や学習内容、各領域が均等になるよう配列する。

エ　時間配分に無理がない配列を工夫する。

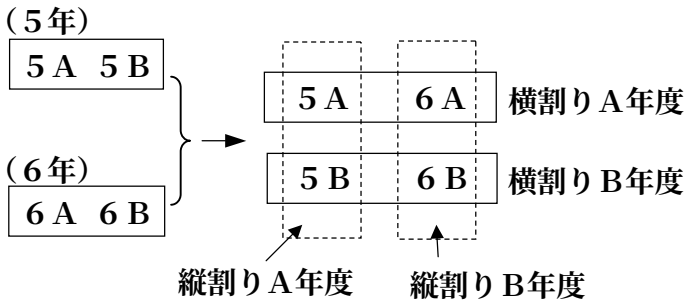
オ　季節や学校・地域の行事等を考慮した配列を工夫する。

③　Ａ・Ｂ年度方式による同内容指導

ア　縦割り方式

両学年の学習内容を２年間にわたって、別々に配列する方法である。例えば、第１年次は５年の内容を、第２年次は６年の内容を指導するという計画である。

＜同内容の組合せ方法の概略＞



イ　横割り方式

領域・分野の中で系統性や順序性を考慮しながら、両学年の内容を混合して配列した指導計画を立てる方法である。この案によって学習すると、第６学年で学習する内容を第５学年で学習したり、逆に第５学年で学習する内容を第６学年で学習したりすることになる。

(4)　学習指導の工夫

①　直接指導

ア　学習の方法、条件を整える時間とする。

イ　自主学習を支える基礎・基本の学習の場とする。

ウ　学習を確認して認め賞揚し、間接指導の学習時への意欲付けの時間とする。

②　間接指導

ア　間接指導の見直し

・　直接指導等で与えるような学習内容が設定できる。

・　自ら学ぶ学習を積極的に取り入れる。

・　自主的に学習を進めていく方法や態度を身に付ける。

イ　間接指導の充実

・　自主性を養う絶好の機会とする。

・　児童生徒が課題を解決する時間とする。

・　じっくり考える時間とする。

・　小集団学習の時間とする。

・　学習事項のフィードバックと、次の直接指導につながる準備学習とする。

ウ　間接指導の方法

・　学習資料による方法　　（学習の手引、ワークシート、参考書、問題集、辞典等）

・　話合い学習による方法　（ガイド学習、グループ学習、ペア学習）

・　教育機器による方法　　（パソコン、ワープロ、ＯＨＰ、テレビ、ＶＴＲ等）

エ　間接指導時の留意点

・　学習のねらい、内容、方法をしっかり把握させる。

・　各教科の本質に立った学習の仕方や、教育機器の操作技能を身に付けさせる。

・　学習の手引や課題プリント等を準備しておく。

・　課題の内容には、質と量に幅をもたせる。

・　個人やグループで評価ができる準備をしておく。

③　ガイド学習による間接指導

ア　ガイド学習のねらい

ガイド学習は、学年の発達段階に即して、単純なカード学習から始まり、基礎学習、教科学習を経て、問題解決的な学習へと移行していく。したがって、単なるリーダー学習とは違っているので、学習方法をしっかり身に付けさせることが大切である。

・　コミュニケーション能力を高める。

・　積極的な学習意欲を養う。

・　学習効率を高め、個別指導を充実させる。

イ　ガイドの役割

・　学習の準備をさせる。

・　学習を進行させる。

・　学習規則を守らせる。

・　学習のねらいを達成させる。

ウ　ガイドの選定

ガイドは、すべての児童生徒、だれもができるようにする。しかし、初期の段階では失敗させないよう配慮する。